

水稲品種「夢いずみ」の施肥法

山戸陸也・橋口昭彦¹⁾(熊本県農業研究センター球磨農業研究所 ¹⁾阿蘇農業改良普及センター)

Michiya YAMATO and Akihiko HASHIGUCHI

Method of Fertilizer Application for Rice Cultivar "Yumeizumi"

1997年に「夢いずみ」を奨励品種に採用したが、偏穂重型で穂数が少なくなりやすい特性がある。そこで「夢いずみ」の安定多収のための施肥法および刈取り適期について検討した。

1. 試験方法

1997年から2年間場内水田において「夢いずみ」を用い、1997年が5月22日播種、6月12日移植、1998年が5月15日播種、6月4日移植で試験を行った。

1) 施肥法は第1表に示したとおりで、⑤区は肥効調節型被覆肥料(緩効率50%、窒素溶出抑制期間45日、溶出期間55日のシグモイド型100日タイプ)、⑥区は肥効調節型被覆肥料(緩効率60%、溶出期間100日のリニア型)を用いた。

2) 刈取り適期調査は、出穂後35日から2日おきに標準区の平均穂数株を5株抜き取り、登熟歩合や外観品質を調査した。

2. 結果および考察

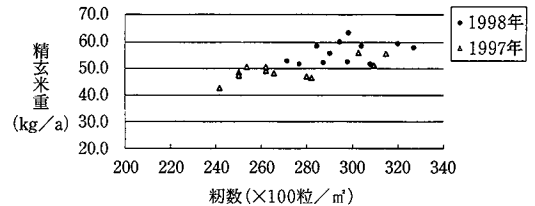
1) 「夢いずみ」で55kg/aの収量を得るための目標籾数は30,000粒/m²であり、その際の穂数は350本/m²である(第1図、第2図)。

2) 基肥の増量による穂数の増加は少なく、基肥は地域の一般的な施肥量でよい。

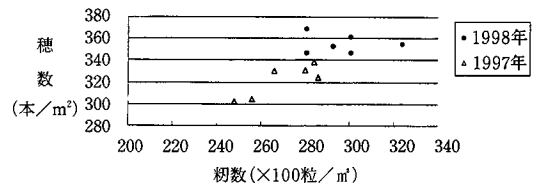
3) 出穂前30日に0.2kg/aの追肥を施用することで、有効茎歩合が高まり、一穂籾数が増加し、目標籾数が確保できる。

4) 肥効調節型被覆肥料を施用する場合は緩効率50%のシグモイド型肥料(窒素溶出抑制期間45日、溶出期間55日、計100日タイプ)を全量基肥施用する。施肥量は慣行施肥窒素成分と同じでよい。

5) 登熟歩合と品質から判断した刈取り適期は出穂からの積算気温で1,000℃程度である(データ略)。



第1図 籾数と精玄米重の関係



第2図 籾数と穂数の関係

第1表 生育・収量調査結果

試験区	基肥	追肥 (出穂前日数)	穂肥		出穂前 30日	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m ²)	玄米重 (kg/a)	収量比 (%)	一穂 籾数 (粒)	m ² 当 り籾数 (×100)	登熟 歩合 (%)	倒伏 程度
			茎数	葉色										
①標準	0.5-0.0-0.3-0.2		440	38.5	80	18.7	324	50.4	100	83.7	265	81.9	無	
②	0.7-0.0-0.3-0.2		434	39.2	80	18.9	327	54.9	109	87.5	279	82.4	無	
③	0.9-0.0-0.3-0.2		435	38.6	82	18.9	338	51.6	103	85.5	290	81.0	無	
④	0.5-0.2-0.3-0.2		430	38.4	82	19.1	346	55.3	110	90.3	304	81.2	無	
⑤	1.0-0.0-0.0-0.0		447	39.7	81	17.7	346	52.4	102	83.3	284	82.3	無	
⑥	1.0-0.0-0.0-0.0		469	40.5	79	17.4	350	51.0	101	78.9	281	79.5	無	

注) a) 基肥、追肥、穂肥は窒素施肥量(kg/a)で表す

b) 出穂前30日の茎数及び葉色は1998年の調査結果、その他の値は1997～1998年の平均値

c) 葉色はSPAD-502による測定値